長野県中野市

西条・岩船遺跡群発掘調査概報

西　条　遺　跡
岩船氏居館跡

第二次調査で３区からみつかった古銭

1991－３

中　野　市　教　育　委　員　会
中野市建設部区画整理事務所

例　　言

1. 本書は中野市駅南地区土地区画整理事業にともない実施した、西条・岩船遺跡群の発掘調査のうち平成元年度及び2年度分の調査概報である。
2. 本調査は、中野市教育委員会が中野市建設部区画整理事務所より委託を受け、駅南地区埋蔵文化財発掘調査団を組織して実施した。
3. 本書は、関孝一・郷道哲章・綿田弘実の指導により、藤沢高広・千葉剛成が執筆・編集した。
4. 発掘調査は現在継続中のため、本報告は、発掘調査の終了をまって行う予定である。

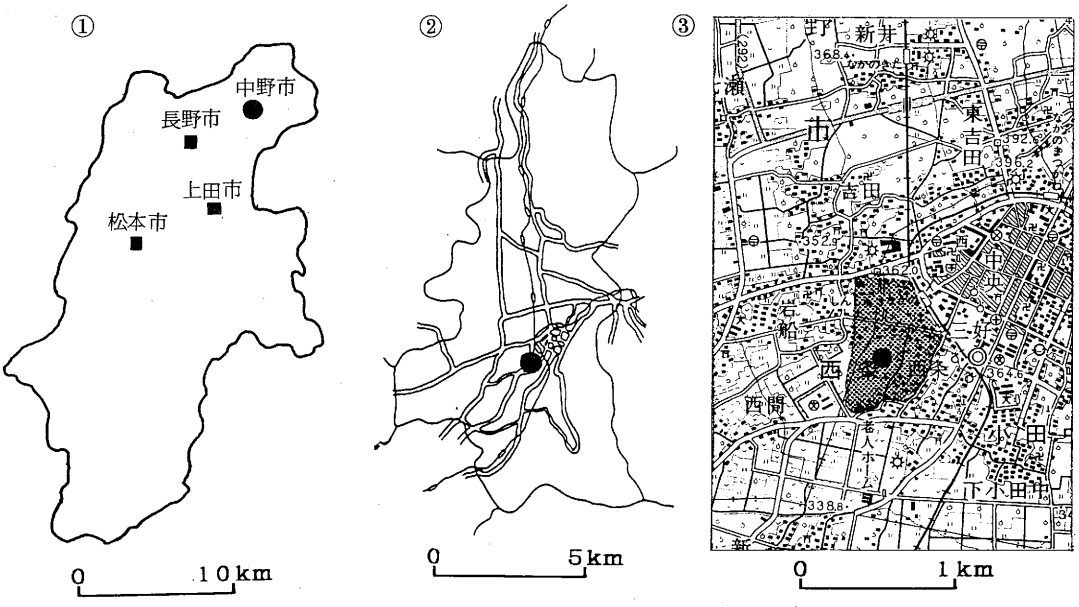
調査のまとめ

遺跡名　西条・岩船遺跡群　〈西条遺跡・岩船岩水神社遺跡・岩船氏住居館跡〉
所在地　長野県中野市大字西条字笠屋敷・枝垂桜・並柳
　　長野県中野市大字岩船字宮上・道添・屋敷添・西条境・中島

	時代	遺構	数	遺物
第一次	平安	住居址	4	カマドのみ確認　土師器　甕・坏
		土壙	2	土師器・須恵器　甕・坏・椀　灰釉陶器　椀・皿
第二次	弥生	住居址	9	弥生中・後期土器　甕・台付甕・壷・高坏・甑・磨製石鏃・砥石
		小竪穴	2	弥生後期土器　甕・台付甕・壷・高坏・磨製石斧
		土壙	13	弥生後期土器　古墳前期土器　甕・壷・鉢
	平安	住居址	1	土師器・須恵器　甕・坏　灰釉陶器　椀・段皿
		土壙	6	土師器　坏
	中世	土壙	3	銭箱・古銭・石臼片
第三次	弥生	土壙	2	弥生後期土器　甕・壷・高坏
	平安	住居址	2	土師器・須恵器　甕・坏・椀・鉢・皿・盤　灰釉陶器　椀・皿
		土壙	2	土師器・須恵器　甕・坏・椀・鉢・皿　灰釉陶器　椀・壷
	中世	土壙	1	土師器　灯明皿

目　　次

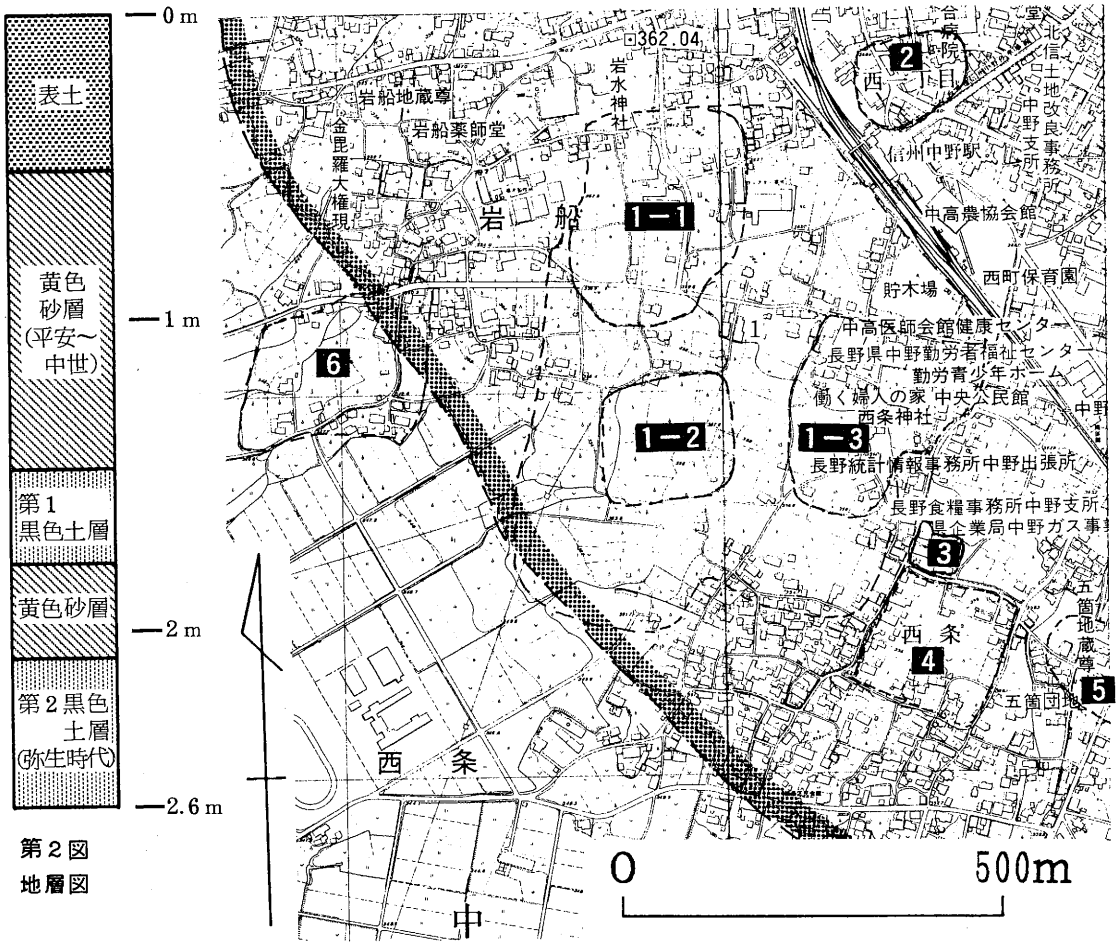
例言
調査のまとめ
目次
Ⅰ　遺跡のありかた …… 1
(1)　遺跡の分布 …… 1
(2)　調査事業区全体図 …… 2
(3)　調査区全体図 …… 4
Ⅱ　調査の成果 …… 6
1　第一次調査 …… 6
(1)　1区 …… 6
2　第二次調査 …… 7
(1)　2区 …… 7
(2)　3区 …… 17
(3)　4区 …… 18
3　第三次調査 …… 19
(1)　B区 …… 19
4　発掘調査のようす …… 21
あとがき



第1図　遺跡の所在地(長野県中野市大字西条・岩船)
①長野県内での中野市の位置
②中野市内での遺跡の位置
③発掘調査地点（国土地理院1／50,000地形図「中野」）

Ⅰ　遺跡のありかた

(1)　遺跡の分布



第2図
地層図

第3図　遺跡分布図

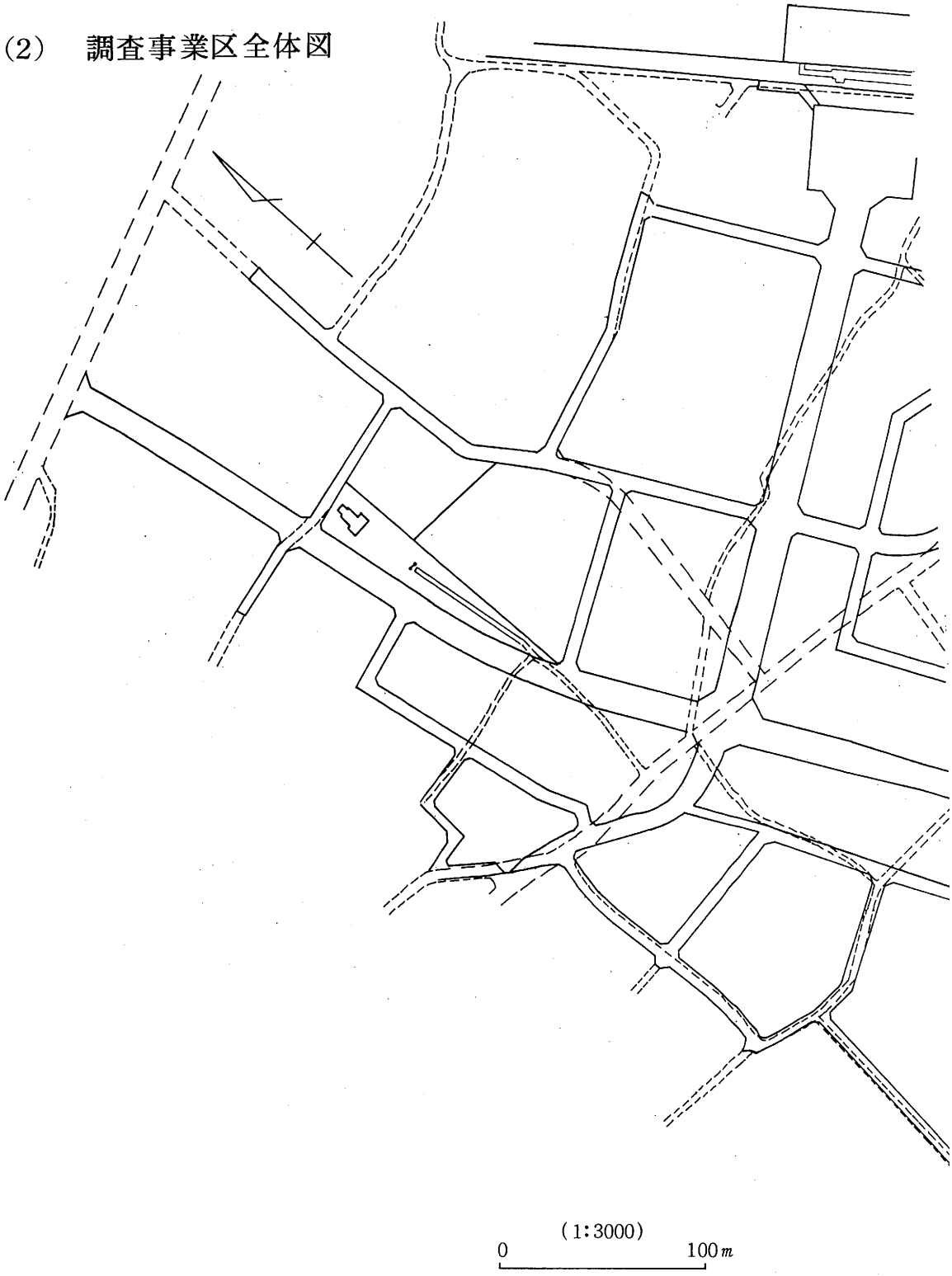
1 西条・岩船遺跡群
　1－1岩船岩水神社遺跡
　1－2岩船氏居館跡
　1－3西条遺跡
2 寿町遺跡
3 西条長屋塚遺跡
4 西条東屋敷遺跡
5 五加遺跡
6 岩船遺跡

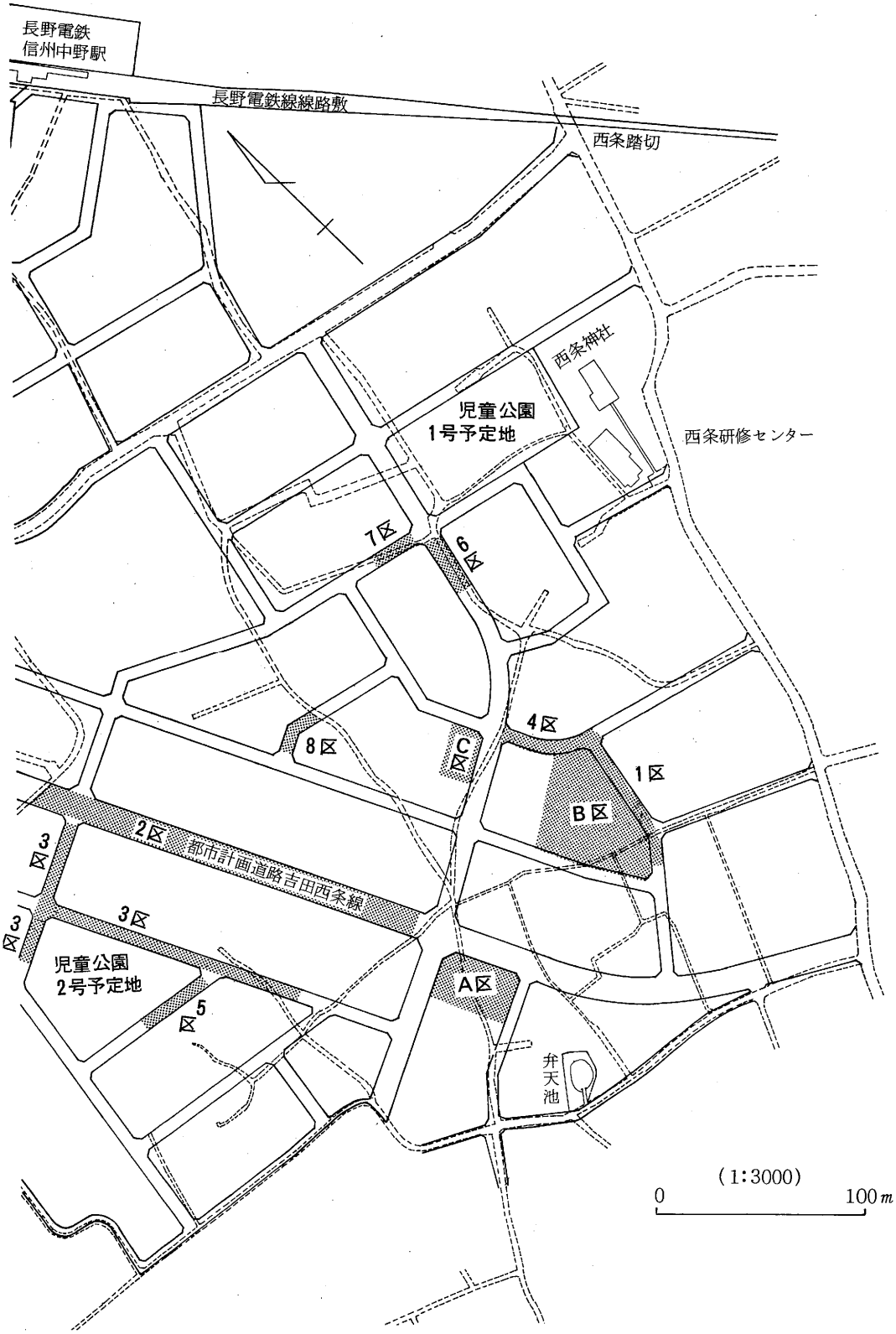
西条・岩船遺跡群は、志賀(しが)高原から流れでた夜間瀬川(よませ)により形成された、中野扇状地(せんじょうち)の扇端(せんたん)部(ぶ)に広がる集落地帯にある。

今回の調査では、地下2～3mから弥生時代の住居址などが、地下1m前後からは、平安時代から中世の住居址などが発見された。

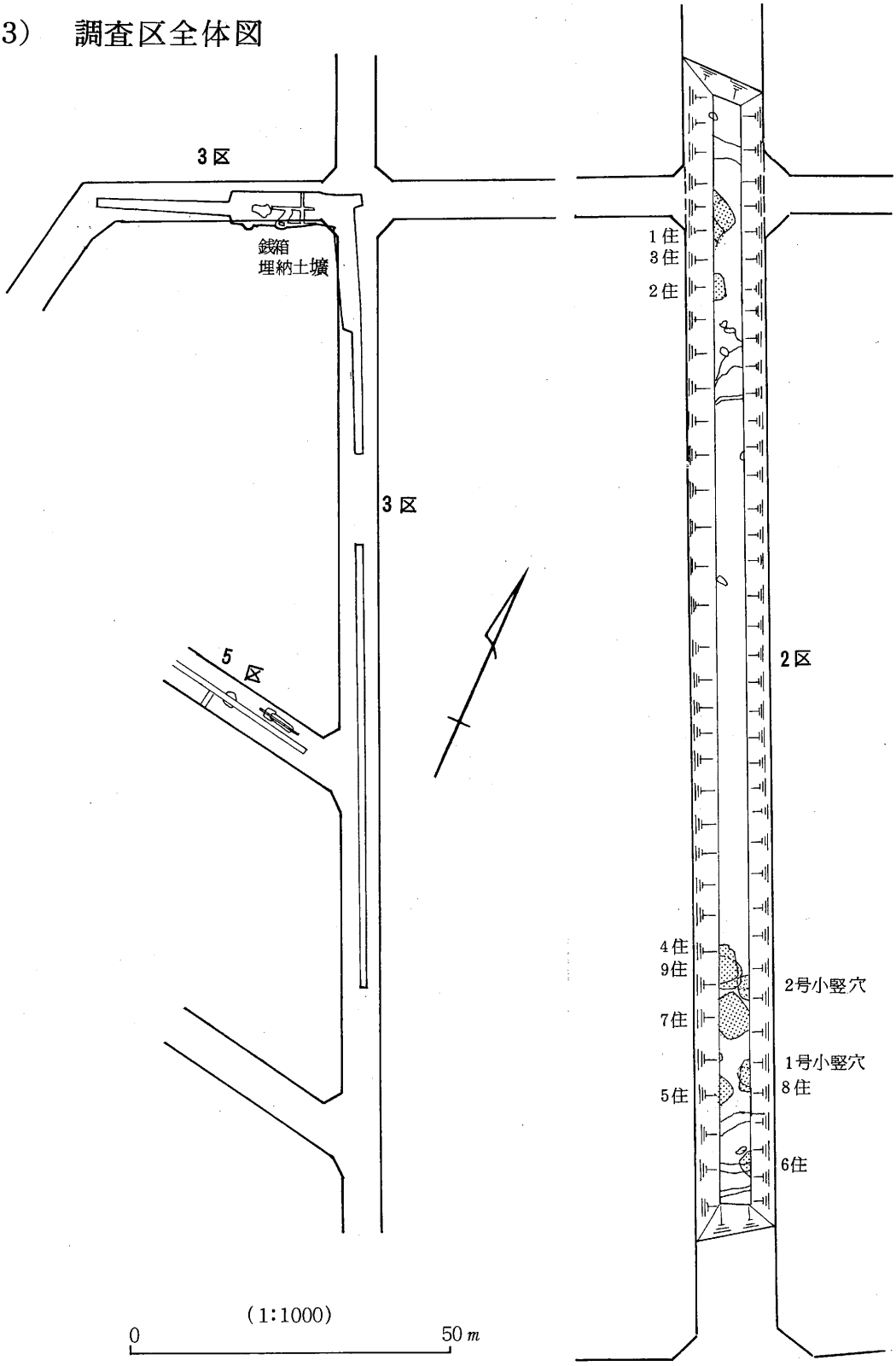
発掘調査に伴う土層(どそう)観察の結果、この地域はたびたび夜間瀬川の氾濫(はんらん)をうけ、厚い土砂におおわれてきたことが確認された。

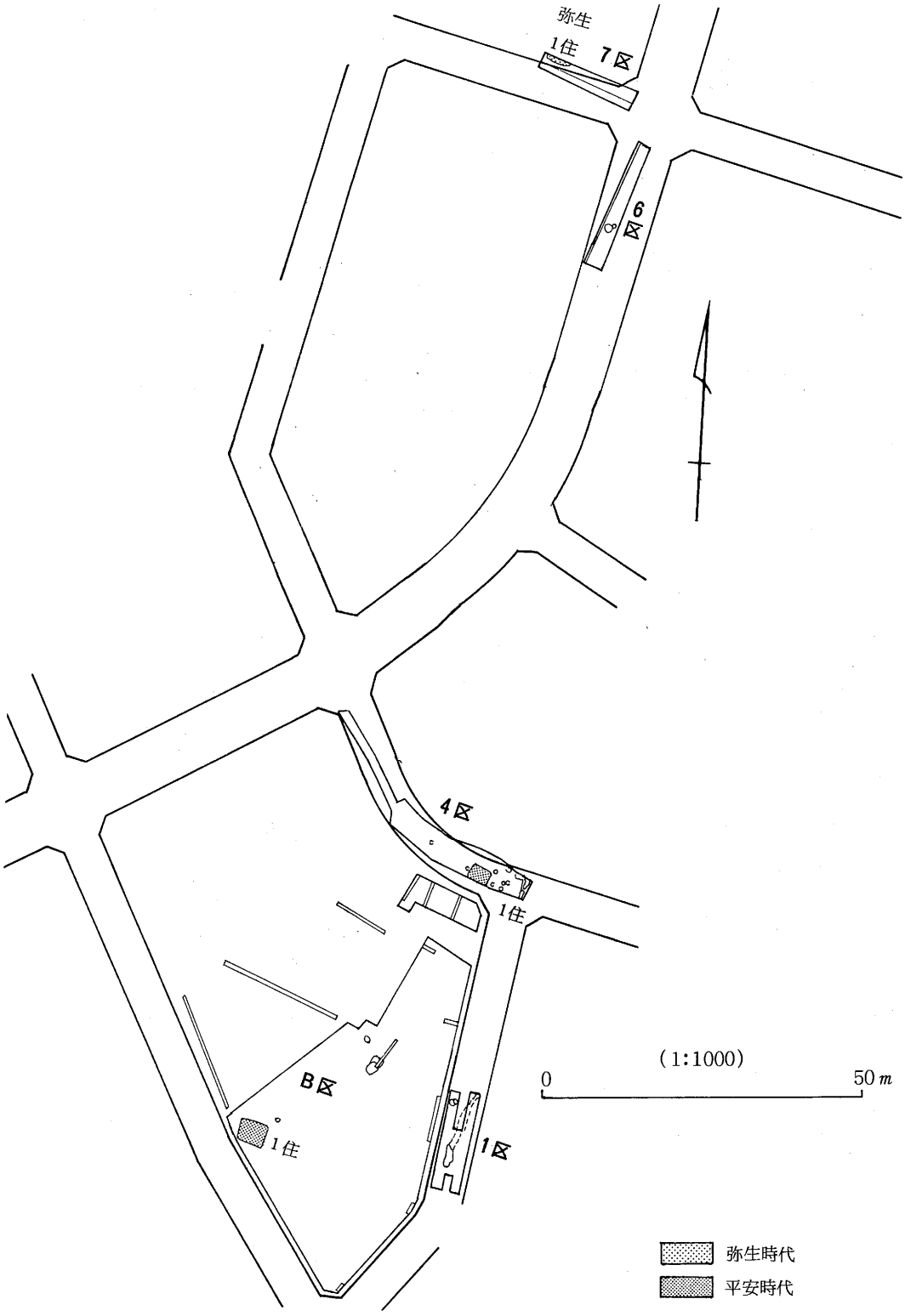
(2)　調査事業区全体図




長野電鉄
信州中野駅
長野電鉄線線路敷
西条踏切
西条神社
児童公園
1号予定地
西条研修センター
7区
6区
4区
8区
C区
1区
B区
2区
都市計画道路吉田西条線
3区
3区
3区
児童公園
2号予定地
5区
A区
弁天池
(1:3000)
0
100m

(3)　調査区全体図


3区
銭箱
埋納土壙
3区
5区
1住
3住
2住
2区
4住
9住
2号小竪穴
7住
1号小竪穴
8住
5住
6住
(1:1000)
0
50 m


弥生
1住
7区
6区
4区
1住
B区
1住
1区
(1:1000)
0
50 m
弥生時代
平安時代

II　調査の成果

1　第一次調査（平成元年2月19日～2月21日）

(1)　1　区

南端でみつかった平安時代のカマド

住居址の確認はできなかったが、幅50cm、高さ30cm程度の石を芯にしてつくったカマドが地下70cmから4基発見された。
このカマドは内部に甕と坏が落ちこんでいる。

溝の跡と土器

この溝は幅1～2m、深さ20cm程度の自然流路で、延長15mが確認できた。径20～30cm大の礫と砂利混じりの土で埋まり、中には多量の須恵器・土師器の破片が入っていた。

2　第二次調査（平成元年7月19日～8月30日）

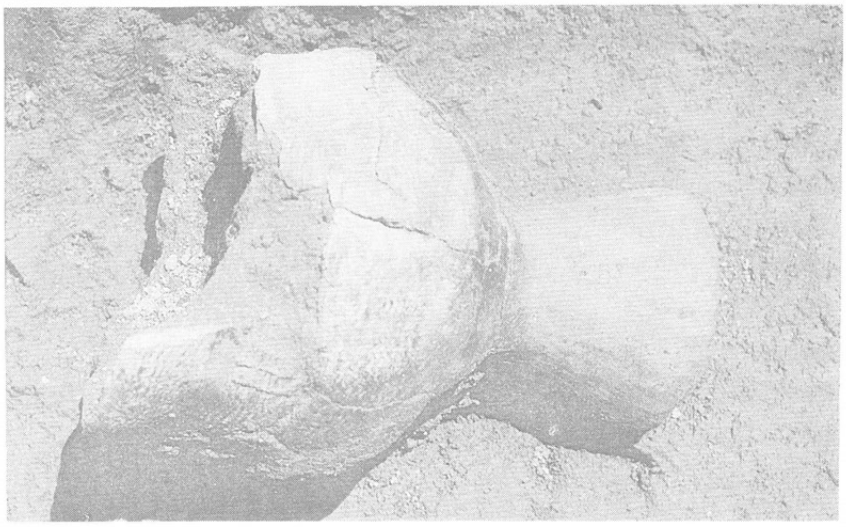
(1)　2　区

1号・3号住居址（弥生時代）

どちらも地下3mで発見された弥生時代の住居址（じゅうきょし）であるが、1号住居址が埋まったあと、3号住居址が掘りこまれていることが確認された。

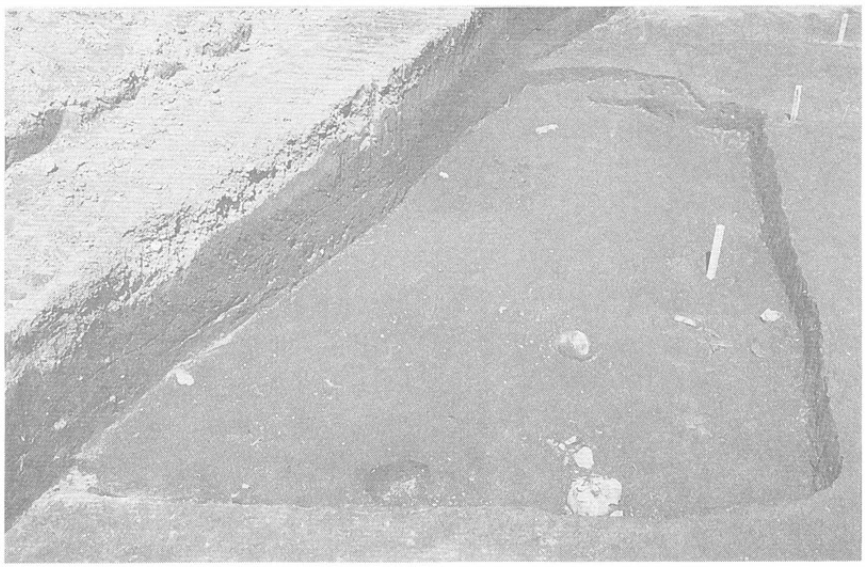
1号住居址は東西6.5m以上、南北2.9m以上の規模で、調査できたのは住居の半分以下のため、炉（ろ）などは不明である。柱穴2個と赤塗りの高坏（たかつき）・甕（かめ）・壺（つぼ）などが出土した。

3号住居址は東西2.4m以上、南北2.2m以上の規模で、1号住居址の東側を破壊してつくっている。一部のみの確認のため、詳細は不明である。少量の弥生土器片が出土した。



1号住居址の甕

1号住居の東隅で出土した高さ20cm、口径12cmの台付きの甕で、胴部には波形の文様が描かれ、台部は丁寧に磨かれている。口縁が半分欠けてはいるが、ほぼ完形である。

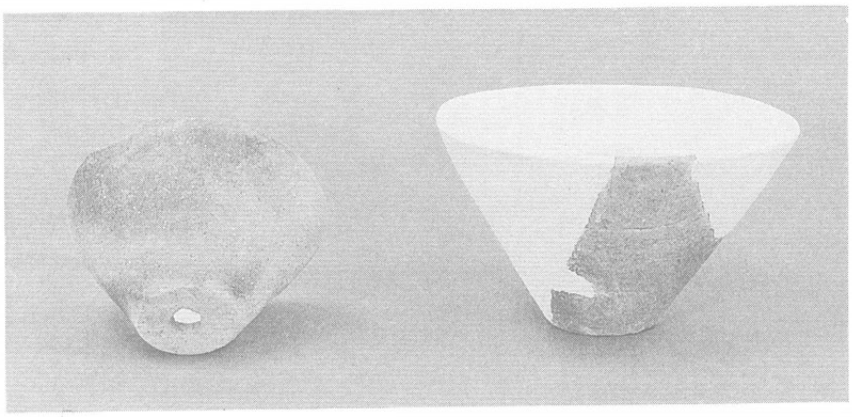


4号住居址（弥生時代）

地下3.0ｍで発見された。東西3.5ｍ以上、南北5.3ｍ以上の規模で、調査できたのは住居址の半分程度のため詳細は不明である。床面は黄色の粘土をしいてたたきしめているので非常に硬い。

4号住居址の甑出土状況

甑（こしき）は米を蒸すための土器で、本住居址では２個出土しており、１個はほぼ完形である。

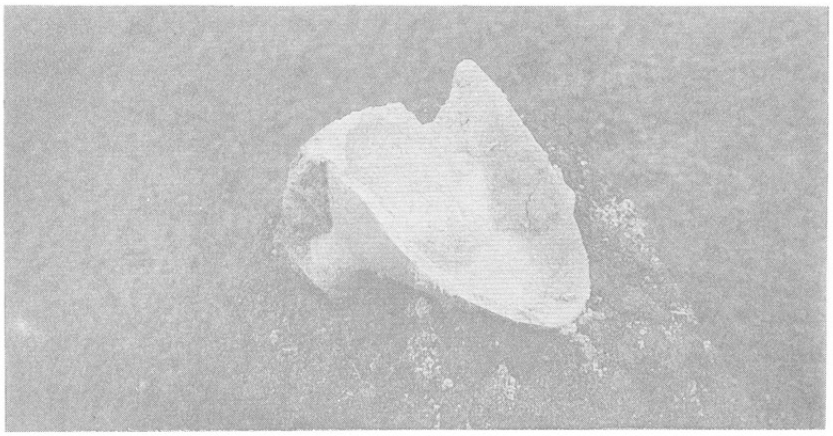


4号住居址の甑

15㎝程度の鉢形（はちがた）で、底に１㎝の穴がある。それを板などでふさぎ、米を入れて甕にのせ、炉にかけた。

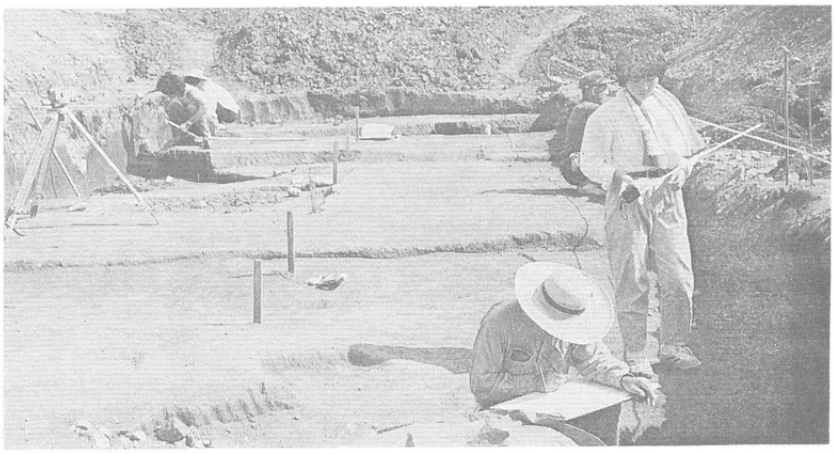
5号住居址（弥生時代）

地下2.0m で発見され、東西3.8m 以上、南北3.5m 以上の規模である。半分以上が調査区外となる。床面に厚さ1cmの黄色の粘土をしいてたたきしめ、非常に硬い。赤塗りの土器が出土した。



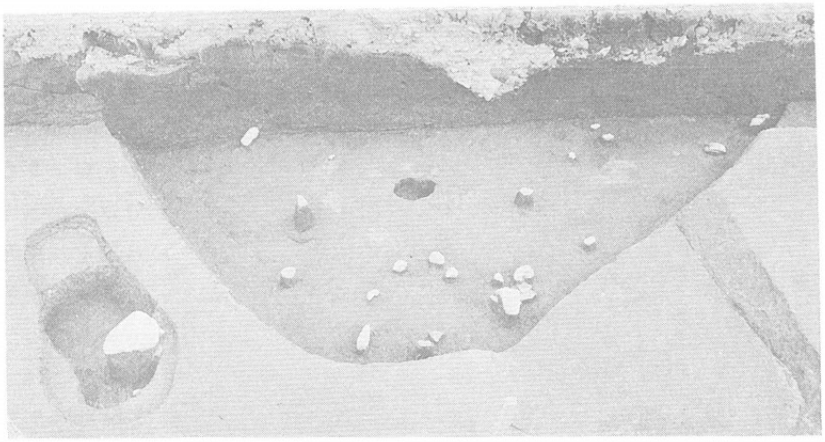
5号住居址の高坏

表面全体を赤く塗った土器で、脚部が欠けている。口径18cmで、高さは20〜25cm程度と考えられる。



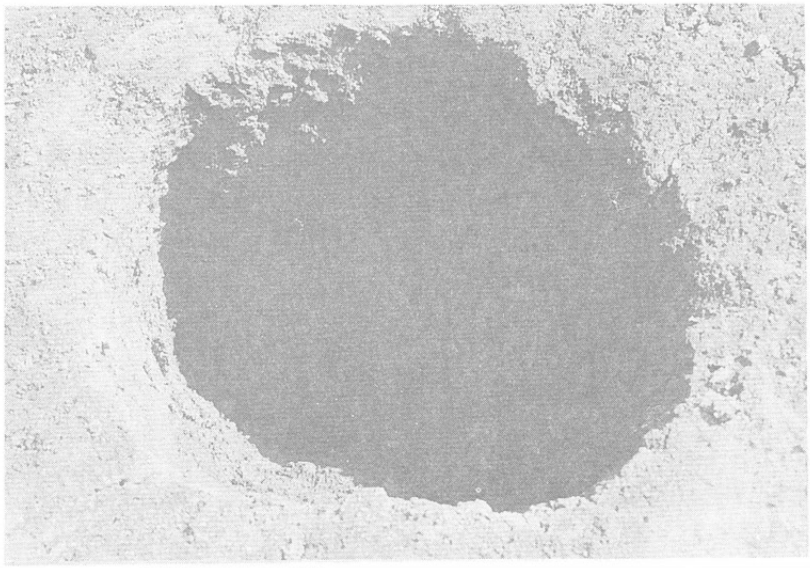
住居址を覆う地層の観察と記録のようす

住居の埋まり方を考えるため、地層を観察し、記録している。この住居は故意（こい）に埋められたり災害で埋まったのではなく自然に埋まったものである。



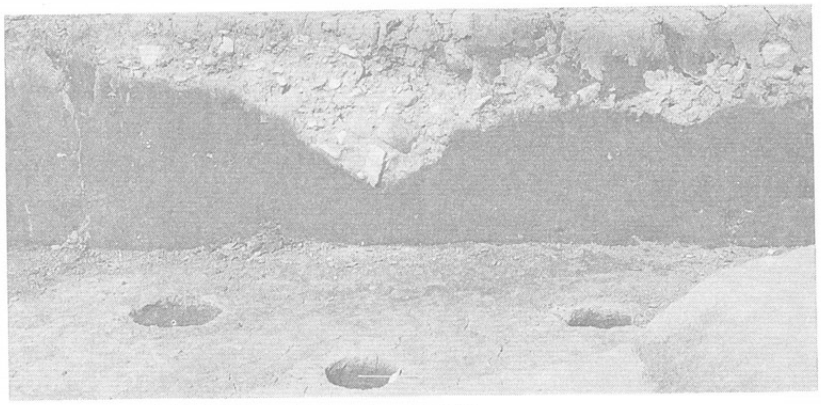
6号住居址（弥生時代）

地下1.5ｍで発見され、東西3.9ｍ以上、南北2.8ｍ以上の規模である。半分以上が調査区外となるが、床面に黄色の粘土を貼っていることや、二個の柱穴が確認できた。



6号住居址の柱穴

住居址の中央付近にある、柱を立てた穴で、直径20cm、深さ30cmをはかる。縁には、住居の床面に貼った粘土の一部が残っている。



6号住居址の上部に残る河川跡

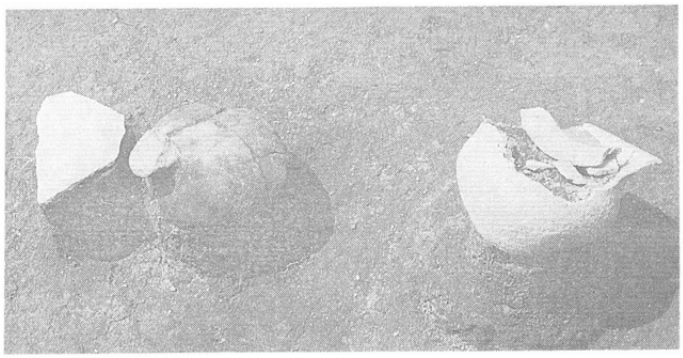
住居址が完全に埋没した後にその上を流れた川の跡で、このような一時的な川を含めた河川跡がいくつもみつかっている。

7号住居址（弥生時代）

地下2.0m で発見され、東西6.8m 以上、南北5.2m 以上の規模である。弥生時代の住居の中でも大型で、2ヵ所の炉がある。

7号住居址の炉

本住居の２ヵ所の炉のうち中央の炉で、地面で直接火をたいたため、土が赤く変色している。これは何度も長時間にわたって火をたいたためである。



7号住居址の甕

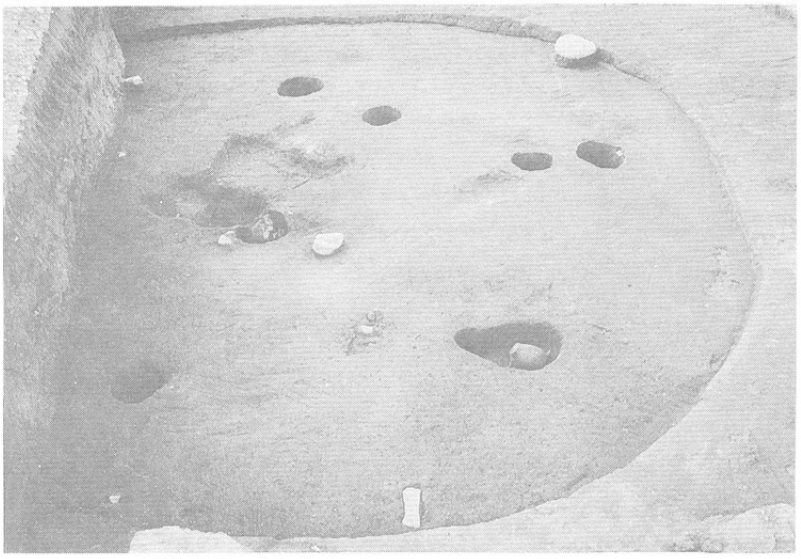
二つとも台付甕である。右は上半分が欠けいたみが激しいが、表面に波形（なみがた）の文様（もんよう）が残っている。左は台と口縁の一部が欠け表面は剥（は）がれ落ちているため、文様はわからない。

8号住居址（弥生時代）

地下2.0mで発見され、東西2.2m以上、南北4.5m以上の円形または楕円形になると思われる。1号小竪穴の下からみつかり、炭化した木片が多量に散っているところから、火災を受けたものと思われる。

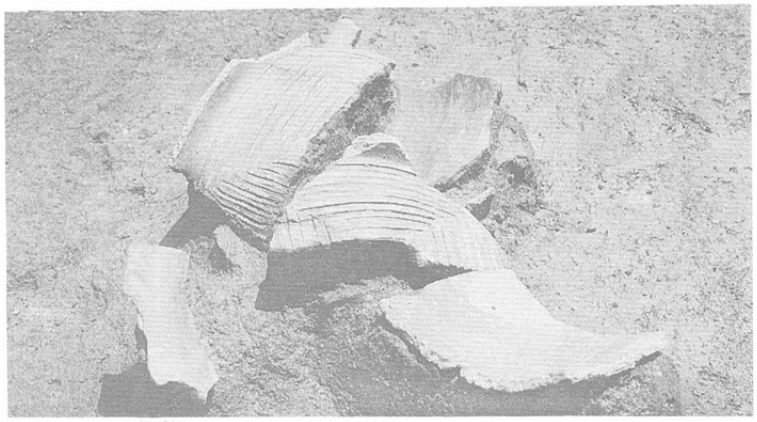
8号住居址の炭化材

炭化材は、最大のもので長さ50cm、幅40cm、厚さ10～12cmほどで、7個の塊に分かれていた。柱材かどうかは断定できない。



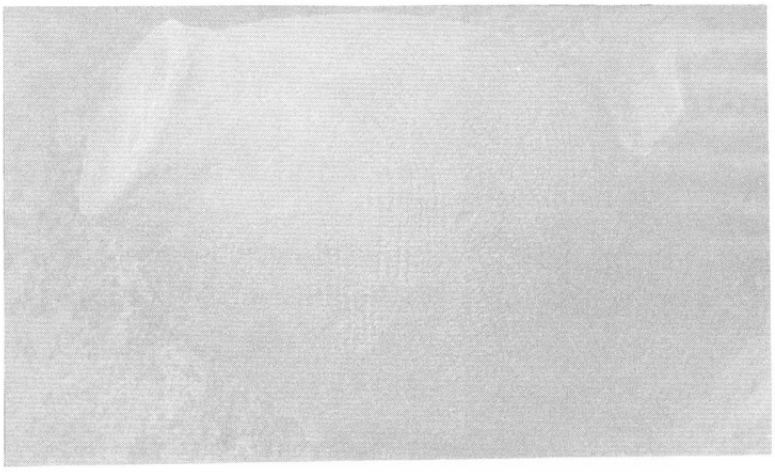
9号住居址（弥生時代）

地下2.0*m*で発見され東西3.5*m*以上、南北4.5*m*以上の規模である。4号住居址の下からみつかり、弥生中期の「栗林式」といわれる型式の土器が出土した。詳細は不明であるが、柱穴が2個確認されている。



栗林式（くりばやし）の甕

住居の床面につぶれた状態で出土した。栗林式の甕で「コ」の形をいくつも重ねた文様をもち、表面はきれいにみがかれている。底部が欠けているが高さは25*cm*程度になるとみられる。



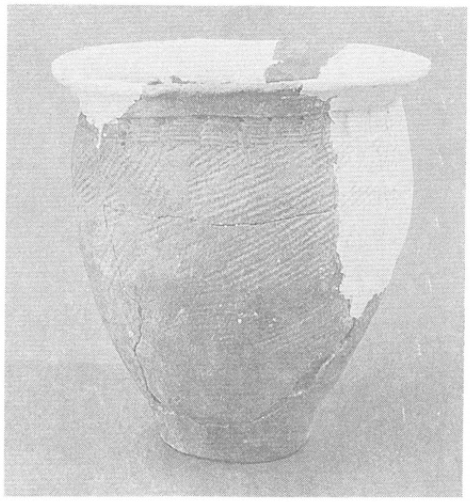
栗林式の甕

栗林式の甕で、住居内の穴の中に逆さまの状態で入っていた。高さ20*cm*で、胴（どう）には縄目の文様がついている。ほぼ完形で出土した。

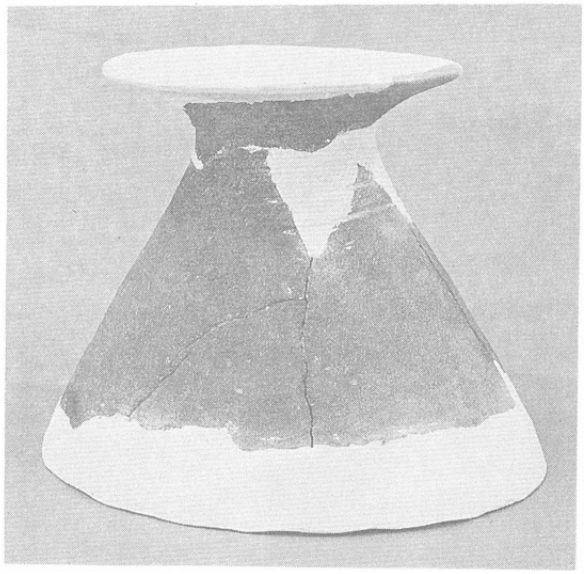
栗林式の甕

床面につぶれていた。底部を欠くが、推定される高さは20〜25cm程度である。口径は15cmになり、口縁の端には縄文がつけられている。

住居中央部の穴の中からみつかった甕で、逆さまの状態で穴の中にはいっていた。縁の大半は欠けているが、残っている部分から口径が15cm程度になる。高さ20cmの甕で胴の周囲には縄文がつけられている。

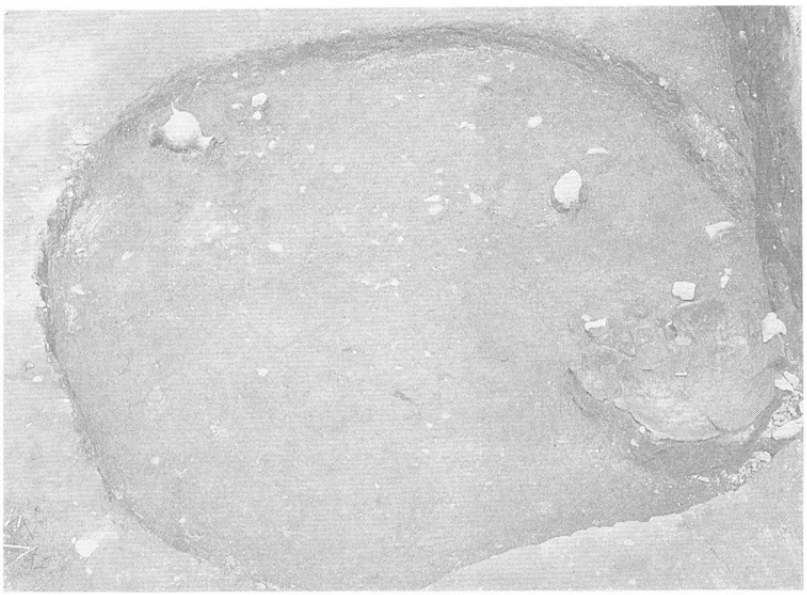


栗林式の甕



栗林式の壺

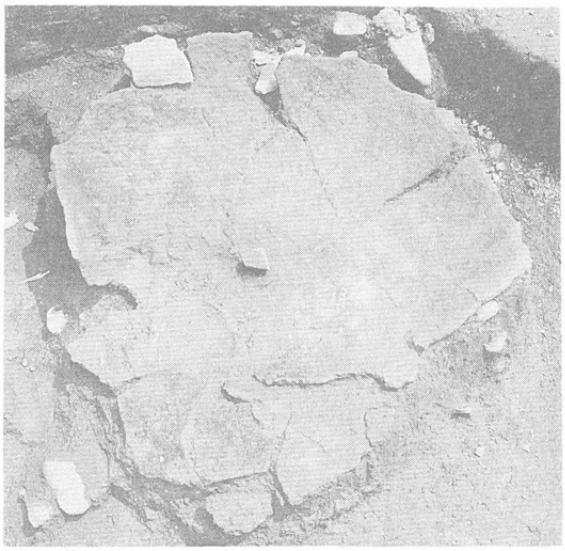
9号住居内の土壙(どこう)からばらばらの状態で出土した。栗林式の壺で、頸部に幅4mmの線が1〜1.5cmおきに4本引かれ、その間に縄文がつけられている。下半分は不完全で、復元すれば高さは60〜80cmになると思われる。



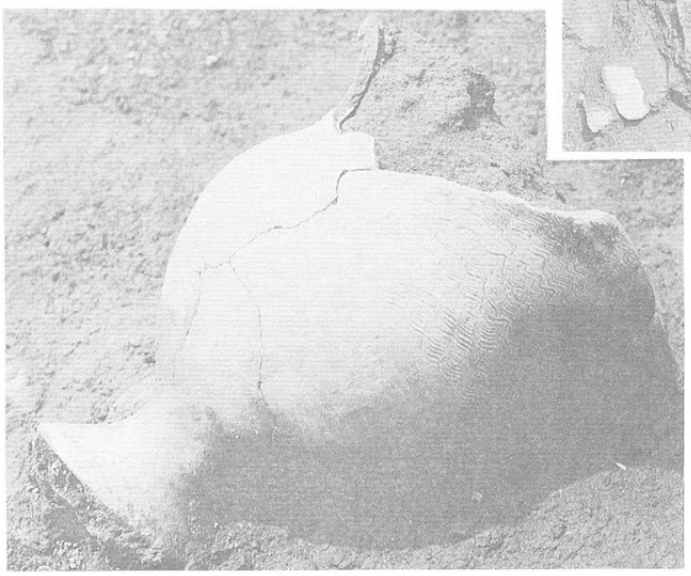
地下1.5mで発見され、東西2.7m、南北2.5mの規模である。ほぼ全体を確認でき、柱穴をもたない。粘土を貼った床の上に柱を立てたと考えられる。床の上には大型の壺の下半分と、ほぼ完全な台付甕がある。

1号小竪穴（弥生時代）

小竪穴の東隅からみつかった壺で下半分しかなく、外側に向かって割れてつぶれた状態で出土した。復元すると、高さ1m、直径50cm程度になる。外面はしっかりしていたが、内面ははがれてボロボロになっていた。



東隅から出土した大型の壺

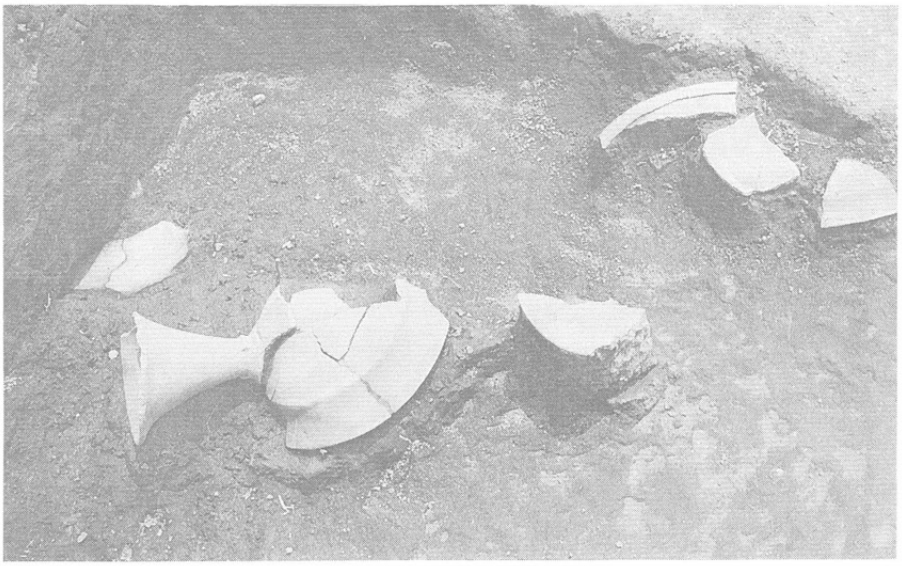


西隅からみつかった台付甕で、高さ40cm、口径16cmのほぼ完形である。胴部には波形の文様が描かれ、非常に丁寧に作られている。

西隅から出土した台付甕

2号小竪穴

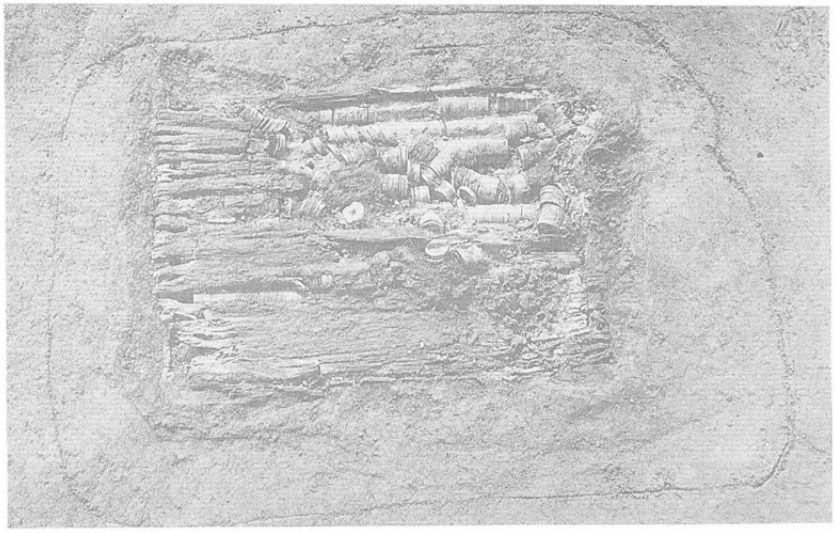
地下1.5mで発見され、東西2.7m以上南北2.5m以上の規模である。
柱穴がないことから、黄色の粘土を貼った床の上に、直接柱を立てたとみられる。1号小竪穴と同様に一時的に使われたと考えられる。用途としては特殊な行事（祭礼・出産・葬式等）の際に使われたのではないかと思われる。
この小竪穴は中心部の地面が焼けて赤く変色していたので炉をもっていたと考えられる。また床の上につぶれた状態で高坏や、中型・小型の甕が出土した。



赤く塗られた高坏

全面を赤く塗られ、高さが40cmになる大型の高坏で、ほぼ完形で出土した。このような大型の高坏は、同地区内でもみつかっていない

(2) 3 区

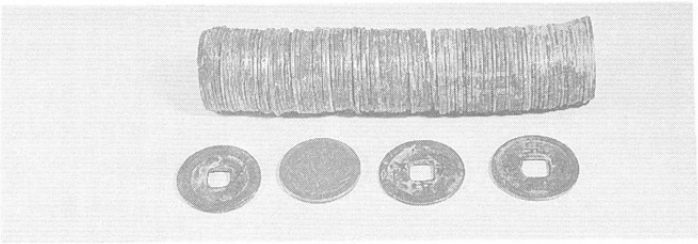


銭箱と古銭

銭箱は横43cm、縦33cm、深さ21cmの針葉樹の板を釘で止め、杉皮のようなもので蓋をしてある。中には97枚で1本にまとめた銅銭が約37000枚詰まっていた。銅銭の種類から、平安時代末から、室町時代初期の間に埋められたと推定される。

銭箱の内部

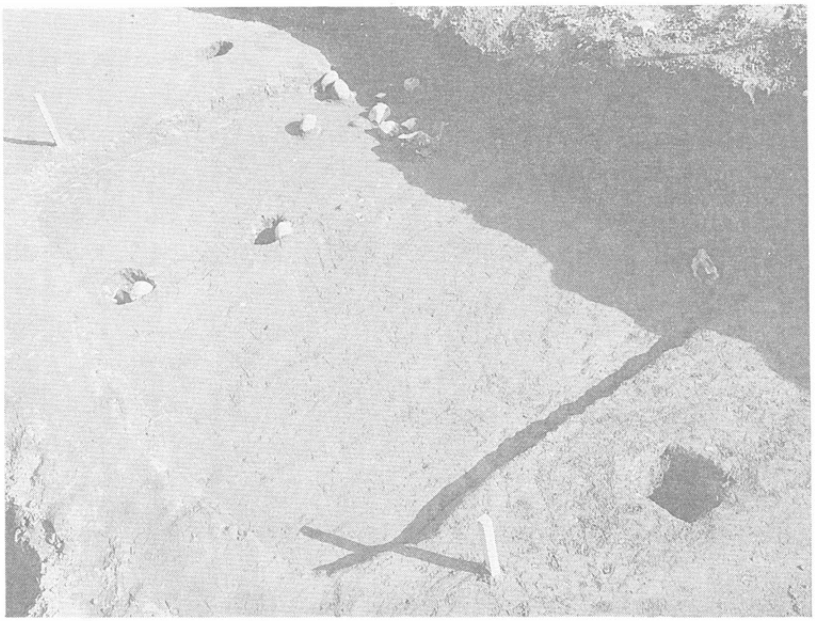
このような状態で1段に約36列並べ、10～11段にきちんと重ねた状態で詰められ、箱の底には銭の重さでくぼんだ痕がついていた。銭は緑青のため青緑色になっていたが保存状態は非常に良く、銭を通した縄も残っていた。



発見された古銭

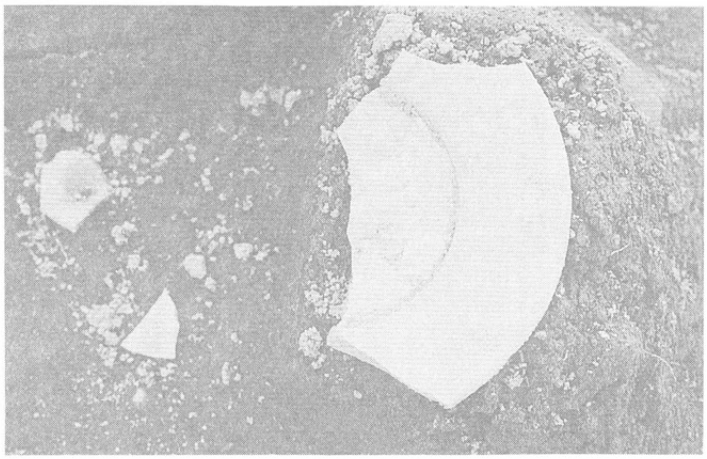
この銅銭は約780～1300年前に中国で作られたものである。中心に四角の穴があり、現在の十円玉と大きさ・重さはほぼ同じだがわずかに薄く、1mm程度大きい。重さは1枚約3.5～3.0gになる。

(3) 4 区



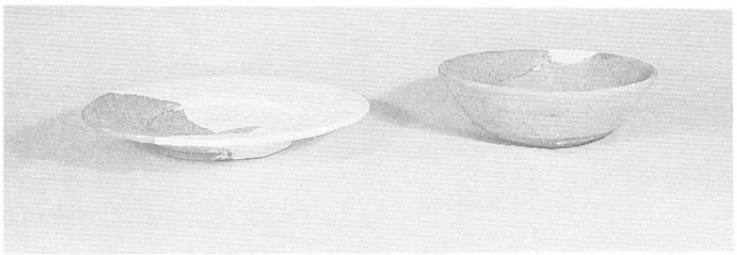
1号住居址（平安時代）

地下1.2mで発見され、東西3.5m、南北2.8m以上の規模である。黄色の砂地の上に粘土を貼った床をもつ。一部が用地外のためカマドが確認できなかった。東南の隅からは灰釉陶器の皿や土師器の坏がかたまってみつかった。



灰釉陶器の皿　出土状態

住居址の東南の隅にかたまっていた20cm程度の石のそばにおかれた状態で出土した。灰釉陶器は小さな破片を含めて5点ほど住居址内より出土している。

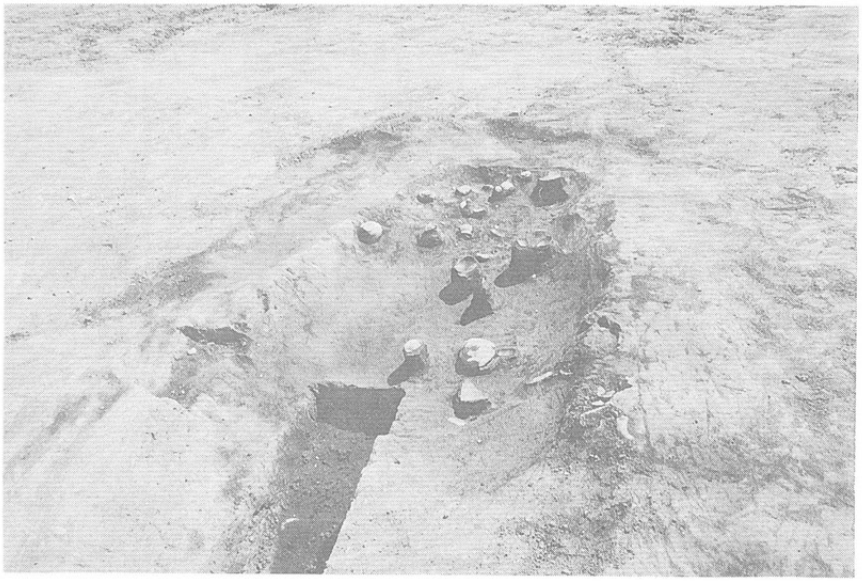


灰釉陶器の皿と土師器の坏

右は灰緑色の釉薬のかかった灰釉陶器の皿で、内側に段があるため「段皿」といわれる。直径18cm、高さ2.5cmをはかる。東海地方産である。左はほぼ完形の土師器の坏で、直径13cm、高さ4cmをはかる。

3　第三次調査（平成２年７月23日～８月12日）

（1）　B　区



1号・2号土壙（平安時代）

1号土壙（どこう）は東西1.4m、南北2.6m、2号土壙は東西1.6m、南北1.7mの規模である。
地下30cmにあり、2号土壙の埋まった後で1号土壙が掘られているが、どちらもほぼ同時期の土器が出土した。

土器の出土状態

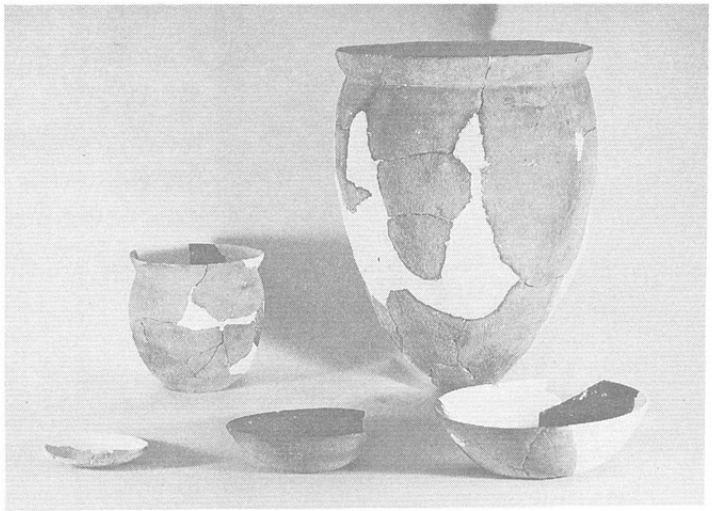
深さ約20cmの土壙の中からは、内側に煤（すす）を吸着させて黒くした坏や、大小の甕・陶器の壺などが出土した。
また、無傷の坏が1個ある。

地下30cmで発見され東西4.9m、南北3.8mの規模で、東壁の中央にカマドがあり、芯材として積んでいた石が住居内に散らばっていた。

1号住居址（平安時代）

カマドの南側に積み重なるようにして70～80個分の坏などの破片がみつかったがほぼ完形に復元できたのは、20個程である。食器が主で、そのほとんどが内側を黒くした内黒土師器である。

カマドの南側で出土した平安時代の土器



住居内でみつかった平安時代の食器で、大小の甕、椀（わん）、坏、皿（さら）がある。大型の甕はカマドの中から、その他はカマドの南側から出土した。坏の胴部には「北」の字が墨で書かれており、同じものが住居内から3個みつかっている。

1号住居址の平安時代の土器

4　発掘調査のようす

住居址や土壙など、遺構の写真撮影のため、清掃しているようす。

2区内の発掘調査風景（平成元年7月）

銭箱をこわさないように、周囲の土砂ごと枠板で覆って運び出す作業のようすと見学者。銭箱はあとで化学薬品をしみこませて、永久に保存するための処理を行った。

3区内でみつかった銭箱の運びだしと見学者（平成元年8月）

幅1ｍ程の溝の中に埋まった土を掘り出して底までの深さなどを調べている。

B区内での調査のようすと見学者（平成2年8月）

あ と が き

平成元年1月から始まった駅南地区の土地区画整理事業にともない、西条遺跡・岩船氏居館跡を中心とした中野扇状地端部の遺跡群の範囲確認調査と、道路敷内での発掘調査を行ってきました。以前は、西条神社と岩水神社を中心とした平安時代の村と、岩船氏居館跡の2つの遺跡の存在が知られていたのみでした。今回までの調査により、地下1mには平安時代の村が、地下2mには弥生時代の村が広がっていることがわかったことは大きな成果であり、西条・岩船遺跡群のあり方を問う新しい材料となるでしょう。また、地下60cmに鎌倉時代以降の村があるらしいということもわかってきましたが、はっきりとしたことは今後の調査により結論がでると思います。最後になりましたが、調査に際し、御協力くださった西条・岩船地区の皆さん、作業員の方、調査団体の方、そして、各建設会社の皆さんに対し、調査団を代表し衷心より感謝申し上げます。

調査団の編成

第一次・第二次調査

顧　問	金井　汲次	壇原　長則
	高橋　桂	湯本　軍一
	田川　幸生	
調査団長	関　孝一	
副団長	郷道　哲章	
調査主任	綿田　弘実	
副主任	千葉　剛成	
調査員	赤松　茂	滝沢　敬一
	荒井　宏	竹内　一徳
	池田　実男	土屋　積
	金井　正三	八町　美幸
	倉石　和彦	平岡　千枝
	黒岩　隆	藤沢　高広
事務局	佐藤　嘉市	小野沢　捷
	高見沢　武	小林　紀夫
	富沢　昭二	徳竹　雅之
	広田ふみ子	
	竹内　貞禎	

第三次調査

顧　問	金井　汲次	湯本　軍一
	高橋　桂	関　孝一
	田川　幸生	笹沢　浩
	壇原　長則	
調査団長	郷道　哲章	
副団長	綿田　弘実	
調査主任	藤沢　高広	
副主任	千葉　剛成	
調査員	赤松　茂	関　茂
	荒井　宏	滝沢　敬一
	池田　実男	竹内　一徳
	金井　正三	土屋　積
	倉石　和彦	八町　美幸
	黒岩　隆	平岡　千枝
事務局	中村　幸次	小野沢　捷
	高見沢　武	小林　紀夫
	富沢　昭二	池田　剛
	長島　敏文	徳竹　雅之
	広田ふみ子	